

義弟様の正体は、私を闇堕ちさせたい腹黒策士
でした

（五年仕込みの魔力調教）

体
験
版

第1話

裏切りの夜・闇堕ち、
はじめます

法外な魔力を持って生まれた。

それなのに、わたくしは誰からも愛されなかった。

——ただ一人を、除いて。

義弟のアルヴィス。

彼だけが、わたくしに触れ、わたくしを満たしてくれた。

あの温もり。

あの甘い声。

わたくしの内側を満たす、濃密な魔力。

それは、孤独に慣れきっていたわたくしにとって――

麻薬だった。

「……遅い」

月明かりだけが差し込む寝室で、セレスティアはシーツを握りしめた。

いつもなら、もう来ているはずだ。

眠る前に必ず訪れて、「ねえちゃま」とささやきながら、彼女の体に魔力を流し込んでくるはずなのに。

胸の奥がざわつく。

……違う。胸だけじゃない。

下腹部が、じくじくと疼いていた。

「……どうして」

呼吸が浅くなる。

体が、あの魔力を思い出してしまったている。

指先が太ももを無意識になぞった。

（来てアル）

けれど、いくら待っても、扉は開かれない。

代わりに思い出したのは――あの少女の顔だった。

透き通るような金の髪。

宝石のようなあおい瞳。

今日、屋敷に迷い込んできたという少女、リリィ。

そして。

『……光属性？ 君が？』

彼女を見た瞬間のアルヴィスの表情。

あれは、わたくしに向ける「甘さ」じゃない。

もっと——深くて、冷たい何かだった。

「……まさか」

嫌な予感が背筋をなぞる。

セレスティアはベッドから転げるように降りると、裸足の

まま廊下へ飛び出した。

隣の部屋。

アルヴィスの部屋の扉の下から、光が漏れている。

そして――

「んっ……あ、あっ♡」

――声。

耳に入った瞬間、体がびくりと震えた。

「アルヴィス様……だめ、そこ……っ♡」

聞きたくなかった声。

でも、耳を塞ぐことができない。

足が、勝手に扉へと近づいていく。

……のぞくな。

見たら、終わる。

頭では分かっているのに。

指が、扉の隙間を押し広げていた。

——視界が、開ける。

天蓋付きのベッド。

その上で、リリイが組み敷かれている。

白い肌が、月明かりに濡れていた。

「いい声だね、リリイ」

低く、甘い声。

「君の魔力……とても甘い」

その声に、セレスティアの喉がひくりと鳴った。

（違う……それは……）

それは、本来、わたくしに向けられるものだった。

なのに。

「ひっ♡ ああっ、アルヴィス様 あっ♡」

ぐちゅり、と湿った音。

彼の指がリリイの中へ沈んでいく。

その光景を見た瞬間――

ぞくり、と背筋が震えた。

「……やめて」

口からこぼれた声は、かすれていた。

視線を逸らしたいのに逸らせない。

むしろもつと見てしまう。

リリーのとろけた顔。

アルヴィスの余裕ある手つき。

そして――

それを見て、熱を帯びていく自分の体。

「……っ、やだ……」

太ももが無意識に擦れた。

こんな状況なのに。

奪われているのに。

わたくしの体は——あの魔力を思い出して、求めてしまっている。

（なんでなんでわたくし……）

悔しさと熱が混ざる。

涙がにじむ。

それでも目を離せない。

「リリィ……ほら、もっと力を抜いて」

「やつ……あ、ああっ♡」

優しい声。

——わたくしに向けられていた、声。

その瞬間。

頭の中で、何かが切れた。

セレスティアは扉を勢いよく開け放っていた。

「——アルヴィス！」

室内の空気が凍りつく。

彼がゆっくりとこちらを振り向いた。

「……ねえちやま？ どうしてここに」

その顔に、焦りはない。

ただ、少しだけ——面倒そうな色。

「どうして……」

声が震える。

「どうして、その子に魔力を渡しているの……？」

リリイが怯えたように身を縮める。

それを見て胸の奥が焼けた。

「それは――」

アルヴィスが軽く息を吐く。

「実験ですよ、ねえちやま」

「うそばかり！」

セレスティアは叫んだ。

「わたくしだけって言ったじゃない！ わたくしだけに……」

っ！

アルヴィスの瞳がずっと細くなる。

冷たい光。

「……ねえちやま」

静かな声。

「あなたは、勘違いしている」

「……え」

「ボクがあなたに魔力を注いでいたのは、『治療』ですよ」

その言葉が胸に突き刺さる。

「あなたが勝手に依存しただけでしょう？」

「…………ちが…………」

「ボクには目的がある。あなただけを見ているわけじゃない」

——突き放される。

完全に。

足元が、崩れるような感覚。

「…………いや」

気づけば、セレスティアは彼にすがりつこうとしていた。

「お願い…………捨てないで…………わたくしには、あなたしか…………」

けれど。

彼の手が彼女を押し返す。

「……邪魔だ」

その一言で。

世界が音を失った。

ああ。

そうか。

わたくしは、最初から――

ただの「都合のいい存在」だったのだ。

ゆっくりと、視線を上げる。

リリイが、震えている。

守られている。

——わたくしの場所で。

（あの娘が奪った）

黒い感情が胸の奥で膨れ上がる。

同時に体の奥が熱を帯びた。

でも、それはもう――

彼の魔力じゃない。

もっと濁った、重たい力。

闇がわたくしの内側からあふれ出す。

肌がじわりと黒く染まっていく。

「……そう」

セレスティアはゆっくりと笑った。

「もう、知らない」

アルヴィスがわずかに眉をひそめる。

「ねえちゃま……？」

「あなたの魔力なんて」

一歩後ろへ下がる。

闇が足元に広がる。

「……代わりは、いくらでも作れるから」

リリィが息を呑む。

その顔を見て確信する。

——壊せる。

「安心して、アルヴィス」

セレスティアは微笑んだ。

「次は——あなたが、わたくしを求めて壊れる番よ」

そして視線をリリィへ。

「まずは、その子から」

闇が弾けた。

セレスティアはそのまま部屋を後にした。

胸の奥で燃えるのはもう依存じゃない。

——復讐だ。

扉を背に廊下を歩き出す。

闇魔力が床に黒い渦を作った。

月明かりの届かない、長い廊下。

——その先。

突き当たりの角に誰かが立っていた。

「あれ？」

声。

「もう、出てきちゃったの？ねえちやま♡」

セレスティアの足が止まる。

今、出てきたばかりの部屋に、いたはず。

なのに。

目の前にいるのは——アルヴィス。

さっきの突き放しの空気はもうない。

弟仮面が戻っている。

「……どうして」

「うん？ ねえちゃまが部屋を出るの、待ってたよ？♡」

穏やかな声。

でも。

いつもと違う。

彼の左手の甲。

魔法陣の刺青が銀色に光っていた。

その指先が宙に弧を描く。

次の瞬間。

黒い鎖が廊下の壁から噴き出した。

「なっ——」

四肢にずるりと絡みつく。

手首。

足首。

胴体。

首。

冷たい鎖がセレスティアを縛り上げた。

「あ、あ……っ」

闇魔力が抗おうとする。

が——鎖は黒い闇魔力ごと吸い込んでいく。

（魔力封じの鎖）

セレスティアの目が見開かれる。

彼女の闇魔力を無効化する魔法陣。

……五年前、まだ彼女が「呪われ姫」と呼ばれていた頃、アルヴィスが彼女のために作ったと言って渡してくれた、あの鎖と——同じ系統の。

「ねえちやま」

アルヴィスがゆっくりと近づく。

弟仮面の優しい笑顔のまま。

「闇に堕ちてくれて、ありがとう♡」

「……っ」

息が止まる。

「五年待ったよ、ねえちやま♡」

彼の指先が彼女の頬に触れた。

「やっと、ちゃんと闇に堕ちてくれたね」

——意味が、分からない。

いや。

分かりたくない、と頭が拒絶した。

「アル……今、なん——」

唇に指が押し当てられる。

「しっ♡」

義弟の優しい声。

「お話は、後でね♡今はね、ねえちやまの誤解を、ちゃんと

解いてあげる♡」

言いながらアルヴィスは鎖を引いた。

セレスティアの体がふわりと宙に浮く。

「えっ——」

「ねえちゃまの部屋に、戻ろうね♡」

黒い鎖に絡め取られたまま、セレスティアは廊下を運ばれていく。

月明かりが揺れる。

闇魔力が、鎖の奥でじりじりと焦げる音を立てた。

……世界が反転している。

復讐するつもりだった。

壊すつもりだった。

なのに、なぜ——わたくしが、運ばれている？

寢室の扉がひとりでに開いた。

扉の向こう。

月明かりの差し込む、いつもの寢室。

ベッドの真ん中に、セレスティアの体がそつと下ろされる。

黒い鎖が四肢を天蓋の柱に縛り付けた。

動けない。

闇魔力も使えない。

「……っ、解いて」

セレスティアは唇を噛んだ。

虚勢を張る。

「冗談はやめて、義弟くん」

義弟くんと。

わざと距離を取る呼び方を選んだ。

なのに——アルヴィスは笑った。

くすり、と。

「ねえちやま♡」

ベッドに上がってくる。

「義弟くんって呼ばれるの、嫌いなんだ♡知ってる？♡」

「……っ」

「だからね♡」

彼の指先が、彼女の唇をなぞる。

「ちゃんと『アル』って呼べるように、しつけしてあげる♡」

「ねえちゃま、まずはお洋服、邪魔だね♡」

くいつと指が動く。

黒い鎖の先端がセレスティアの夜着を引き裂いた。

ぴりぴりぴり。

絹が裂ける音が月明かりの寝室に響く。

「やつ……」

白い肌が暴かれていく。

胸の膨らみ。

腰のくびれ。

太ももの内側。

全部闇魔力で照らされていた。

「ふうん……」

アルヴィスが息を漏らす。

そして。

「ねえちやまの体、ちよつと闇属性混じりだね♡かわいい♡」

くすりと笑った。

（見ないで）

セレスティアの頬が熱くなる。

義弟にこんなふうに見られたことは——なかった。

いや、違う。

「治療」の時いつも見られていた。

でもそれは。

「義弟が義姉を診ている」という建前があったから。

今は——違う。

今、彼の目に映っているのは。

完全に、女として。

「アル……お願い……」

声が震える。

「冗談、なら……解いて……」

「ううん♡」

優しい否定。

「冗談じゃないよ♡ねえちやまね♡五年かけて、ボクが作
ったんだよ♡」

「……え」

「ねえちやまの体♡ボクの魔力で、ボクの形に♡」

言いながらアルヴィスの右手が彼女の左の鎖骨に触れた。

「ここから——」

ゆっくりなで下ろす。

「ここまで♡ゼーんぶ♡♡」

乳房の上を指がなぞる。

とんと。

頂を軽く弾いた。

「あっ——」

短い悲鳴。

たった一度の軽い接触。

なのに体が跳ねた

（うそどうして）

「ね♡」

アルヴィスがうれしそうに笑う。

「五年の成果♡軽く触っただけで、ぴくぴくしちゃう体♡」

「やつ……、待つ……」

鎖の中でセレスティアは身をよじった。

でも闇魔力は鎖に吸われていく。

抵抗の手段がない。

「待たないよ♡」

アルヴィスの指が頂を摘まむ。

「ねえちゃま、こねこねされるの好きだったよね♡」

「やつ、しちゃ……っ」

「こねこね♡」

くにくにと。

指の腹で転がされる。

「ひあっ♡」

声が上がった。

「ね♡ぴくぴくしてる♡」

「ち、ちが……」

「ちゃんと言わないと、止めるよ？♡」

弟仮面のからかい。

甘い声。

でも目は、笑っていない。

「あ、ああ……っ」

ぴくぴく、ぴくぴく。

胸の頂が勝手に反応する。

そして――

もう片方の手が太ももの内側をなで始めた。

「ねえちやまのおまんこ♡もう濡れてるかな♡」

「やめ……っ、その……言い方……」

「ふうん？ねえちやまの『治療』してた時、いつもこの言い方だったけどなあ♡」

「ち、違――」

「忘れちゃった？♡」

指が太ももの付け根に届く。

ぬるり。

濡れた感触が彼の指先を迎えた。

「……うわぁ♡」

アルヴィスがうれしそうに息を漏らす。

「すっごい♡ねえちゃま、おまんこびちよびちよ♡」

「い、言わないで……っ」

「治療の時から、いつもこんなに濡らしてくれてたんだよ♡
知ってた？♡」

（え）

……知らなかった。

ずっと、「治療」だと思っていた。

でも、彼は最初から——分かっていた。

わたくしが、彼の魔力で濡れていることを。

ずっと、ずっと。

「ね♡こねこね♡」

彼の指が入り口の周りをなで回す。

くちゅ。

くちゅ。

くちゅ。

湿った音が月明かりの寝室に響き始めた。

「あ、あぁっ♡」

「ぬぽぬぽしてあげるね♡」

「ひっ♡」

指がゆっくり沈む。

ぬぷり。

関節ひとつ分だけ。

「あゝっ……♡」

濁った、低い悲鳴。

「ね♡ぴったり♡ボクの指♡ねえちやまのおまんこに、
び
ったり♡」

「やつ、はず、して……っ」

「やだ♡」

くすくすと笑う。

「もっと、奥まで知らない♡ボクの形、ねえちやまにちやんと教えなきゃ♡」

ぬぷん。

二本目加わった。

「ひあ♡あ、あ♡♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

指が激しく動き出す。

「ね♡
ぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅ♡」

「あ
づ、
あ
ゝ
ア
つ
♡」

「言葉、可愛くなってきた♡」

「やつ♡やつ、それ♡そこ……っ♡」

「♡?」

指の腹がある一点を押す。

「ぴゃっ♡」

跳ねる。

「ここ？♡ねえちやま、ここ好き♡」

「あゝっ、あゝっ、ふあっ♡」

「ぐちやぐちやぐちやぐちやぐちやぐちやぐちや♡」

セレスティアの体が跳ねた。

限界が近い。

彼にもそれが分かっている。

「ね♡ねえちやま♡もうイケちゃう？♡」

「や、やあ♡」

「いいよ♡イッていいよ♡」

「ち、違っ……まだ……」

「ぐちやぐちやぐちやぐちやぐちや♡」

指の動きが加速する。

「あゝ♡あゝ♡あゝ♡」

「ね♡こうしたいんでしょ♡」

「やっ……あ……♡」

「いっぱい、ねえちゃまの中、ぐちゃぐちゃにしたい♡」

ぐちゅん

「ふぁっ♡」

「ね♡ぐちゅぐちゅされるの、好きだもんね♡」

「ちが……」

「治療の時♡いつもおねだりしてたよね♡『もっと魔力く

ださい』って♡」

「あうっ……それは……」

「あれね♡全部、ボクの精液欲しがってたんだよ♡ねえちやまの体♡」

「——え？」

精液？

……今、なんて。

「ねえちやま♡」

ぐちゅんと。

指が抜かれた。

「ボクのこと、ちゃんと見て♡」

彼がローブの帯を解く。

月明かりに――

硬く反り返った彼自身が現れた。

光っている。

亀頭の中から銀色の魔力が滴っていた。

「これがね♡」

アルヴィスが笑う。

「ねえちやまが、五年間♡体に注がれてた♡ボクの魔力♡」

……ああ。

……治療、じゃなかった。

（……毎回、強い魔力香で、意識を夢現にされていたから）

（……気づけなかった、わたくし、ずっと）

最初から――

ずっと――

わたくしの中に注がれていたのは。

「あ……」

「ね♡ねえちゃまの中、教えて♡ボクの形♡」

ぐぐと

切っ先が押し当てられた。

「やっ……まっ——」

「ぬぼっ♡」

ずぶり。

一気に奥まで

「ふぁ——っ♡♡」

声が裏返る。

体が海老反りになった。

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡

すぐに激しい音が始まった。

「ね♡ねえちやま♡」

「あっ♡あっ♡あっ♡」

「ね♡ぱちゅぱちゅ♡」

「ぱ、ぱちゅ…あゝ♡」

「ねえちやまのおまんこ♡ボクのちんぽに♡ぴったり♡」

「ふあゝ♡あゝ♡」

「ねえちやまの中♡五年かけて♡ボクのために♡作ってき

たんだ♡」

「あゝあゝあう♡」

「ね♡ねえちやま♡ぴったりすぎる♡」

「ね♡ねえちやま♡」

彼の腰が加速する。

ぬぼっ♡ぬぼっ♡ぬぼっ♡ぬぼっ♡ぬぼっ♡ぬぼっ♡ぬぼっ♡

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡

ぐちやぐちやぐちやぐちやぐちやぐちや♡

三種類の擬音が同時に部屋を満たした。

「あゝっ♡あゝっ♡あゝっ♡」

「ね♡ねえちやま♡イツていいよ♡」

「あゝっ♡や、やっ♡」

「ね♡ねえちやま♡」

「ふあゝっ♡アルう♡アル……っ♡」

「うん♡そう♡アル♡」

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡

「ねえちやま♡もっとアルって呼んで♡」

「ア、アル♡アゝアル……っ♡」

「ね♡いい子♡」

ぐぐと。

彼の腰が最奥を押した。

「ふぁ——っ♡♡♡♡」

「ぬぼっ♡ぬぼっ♡ぬぼっ♡」

「ねえちやま♡ねえちやま♡ねえちやま♡」

名前を呼びながら。

名前を呼ばせながら。

「あゝあゝあゝ♡♡♡」

「ね♡イケ♡」

「ふぁ——っ♡♡♡♡」

目の前が白くなる。

体が跳ねた。

ぎゅうと。

中が彼を締め付ける。

「く——」

アルヴィスが息を漏らした。

弟仮面が一瞬だけ消える。

「俺の――」

低い、別の声。

「俺のものだ、ねえちやま♡」

どびゅっ♡

「ふぁっ♡」

どびゅるるるるッ♡

奥に熱い飛沫が叩きつけられる。

「あゝ、あゝ、出て、る……♡♡」

ぶびゅうう……♡♡

長く長く。

彼の魔力が彼女の中を満たしていく。

……あの「治療」と、同じ。

でも、違う。

全然違う。

奥のもっと奥に。

刻印を押すように。

「……はぁ……っ」

セレスティアはぐったりとシートに沈んだ。

黒い鎖がゆっくりと解かれていく。

でももう動けない。

「ね♡ねえちゅま♡」

アルヴィスが彼女の頬に触れた。

「いい子だったね♡」

弟仮面の、優しい声。

「これがね♡」

アルヴィスがささやく。

「『治療』の正体だよ♡」

「……っ」

涙がこめかみを伝った。

「五年間♡ボクは、ねえちやまの中に♡ずっと、しるしを増やしてたんだ♡」

「……………」

「ほんとだよ♡」

くすくすと笑う。

「だからね♡ねえちやまはね♡もう、ボクの魔力じゃないと、生きていけないの♡」

……闇属性が、覚醒した。

復讐を誓った。

なのに――

今わたくしの体は。

彼の魔力で満たされて。

また欲しがってしまっている。

（くやしい）

「ね♡」

アルヴィスが彼女の額にキスを落とす。

「もう、逃げられないよ♡ねえちやま♡」

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。